長篇小説　四十年（第1回）[[1]](#footnote-1)

香山光郎

眞鍮錢の液

祖父がなくなつたのは、私が十九の年で、明治四十三年であつた。祖父はその時七十九歳であつたから、今まで生きてゐるとすれば百十二歳になる勘定である。

私が生まれたのが日清戰爭の前の前の年で、祖父が六十の時であつたから、私には、老人としての祖父の印象しかない。それに、祖父は、私の父母とは同じ家に住んでゐないで、明玉といふ、昔は名妓であつたといふ、妾とずつと別居してゐたから、自然、私が祖父の顔を見る機會も少かつた。記憶を繰つて見ると、私の祖父に對するもつとも最初の印象は私の七歳以前には遡れない。その印象といふのは、丸顔で、髭が眞白で、眼が黄味を帯びて、光輝があつて、そして、怒つた時にはとても聲が大きかつたことだ。祖父は、風釆よく、書家だつたといふ風に、後々までも皆にいはれてゐたが、私の記憶から見ても祖父は屈託といふことを知らなかつたし、いゝことも、わるいことも、その場限りで、直ぐ忘れてしまふ質のやうである。彼は怒り出すと大聲で叱るが、直ぐまた、はつははつはと大聲を出して笑ふ。私が七つ八つの時のことゝ思はれるいくつかの挿話を拾つて見よう。

　或日、私が祖父のところへ行つたら、祖父一人、いつもの席に坐つてゐた。當時已に、私の家の資産の傾いた時で、祖父の住宅といふものも、至つて粗未な、藁茸の百姓家で、二間しかない。それ以上小さくすることの出來ないやうな家であつたが、祖父の、豪放な反面のたしなみで、室内は白紙で貼り、自分の書なども掛けてあるし、調度品だけは、邑内で豪奢な風流生活をした名残で、文庫や、硯床（硯箱で臺のついてゐるもの）や、屏風や、その他文房具などもつてゐるし、酒好きの祖父だから、徳利、盃、盆なども、凝つたものがあつた。真鍮製の盥、啖壺、喫煙具なども、本式のものであり、旅行用、馬上用の品々も、まだ人手には渡らずに、この狭い室内に所狭く置かれてある。私はそんなものを見るのが好きであつた。

　かういふ調度の中に、支那緞子の長座蒲團を敷いて、いつでもいつまでも祖父は、半跏趺見たいな坐りで、坐つてゐるのである。

私は、祖父が好きといふよりも、大變偉い人で、この郡内では、一等偉い人と信じてゐた。それに、祖父が顔を上げて眼がぴかつと光ると、威厳があつたし、また祖父は、無口な方で、私を可愛がる素振りは、口にも顔にも現さなかつたので、私はどちらかといふと、祖父を畏れてゐた。それでも時々祖父の顔が見たくなつては、一人ちよこちよこやつて來ては、しばらく遊んで、何か甘い物でも頂戴して歸るのが常であつたが、私は、その甘い物が欲しさに、祖父のところへ行つたとは思はない。たゞ祖父のその風丰が見たかつたのである。祖父の風格は、たしかに私に取つては驚異で、

『祖父さんは、ほんとに偉いな』

と讃仰したものである。

この日にも祖父はいつものとほり、ぢつと坐つてゐて、私がつかつか傍へ行つて型とほりお辭儀をすると祖父は、

『お前にやるものがある』

といひながら、身體をぐつと廻はして、温突の一番温かい所に、何かの布を被せてあつた、小さい真鍮の食器を取り出すと、

『これを飲め。汁だけ飲むのぢや。』

といふのであつた。

蓋を取つて見ると、粳米と水と、そして、粳米の上に、眞鍮錢が二三枚柔かく光つてゐる。

私がそれを窺いてゐると、祖父は、

『飲むのぢや、飲むのぢや。それ飲んだら體が丈夫になると本に書いてある。』

と催促するので、私は命ぜられる通りに、その上澄みをぐつと飲み干した。ちつともおいしくなかつた。

『毎日今頃來よ』

祖父はいつたが、私はこの妙な藥を何時まで飲んだか、記憶はない。祖父は私の弱々しいのが氣になつて、あんなものを飲ませる氣になつたんだらう。永いことあれを飲んでゐる中には、その眞鍮の貨幣が柔らかになつて、その柔らかになつた貨幣まで飲んでしまふと壮健の身體になるのだと、聞かされた氣がする。しかしその眞鍮錢が柔らかになつたのを飲んだ覺えは母論ない。ただ爾後四十五年を経た今日、祖父の切ない愛情をしみじみ感じて涙ぐむだけである。私のやうな病弱なものが、五十を越して生きてゐるのも、或は祖父の願力に依るのかもしれない。

支那人香師

　もう一つ、その當時の話。

或日私が祖父のところへ行つたら、祖父の座敷の次の間に、眞黒な繻子のものを纏つた、若い男がゐた。私は、この時まで支那人を見たことがないので、びつくりしてしまつた。

祖父は例のとほり坐つてゐる。私は恐る恐るその支那人の前をとほつて、祖父の前に、禮をして、禮が終ると、直ぐその眞黒な、異様な人に眼を向けた。祖父が傍にゐるので怖いことはなかつた。

　支那人は、頭の前の方を青光りのするほど、剃つて、髪を長々と辨髪にして垂らしてゐる。私も辨髪ではあつたが、あんな大人が、丁髷を結ばずに辨髪にしてゐるのがおかしかつた。もつとも竹梳賈りの全羅道の老総角は見たことがある。それはいづれも、貧相で、穢い顔の人であつたが、この支那人は、實に白皙で、上品な顔をしてゐて、ことにその手は眞白で、指は細長く、爪も長かつたが、私の短かい爪よりも奇麗であつた。

　『孫さんですか。』

　その支那人は、實に上手な朝鮮語を使つてゐた。

　『さうぢや。孫ぢや。孫はこれ一人だけぢや。』

　祖父は、珍しくも、その厚い手で私の頭を撫でゝくれた。

　『中國のお客さまぢや。香を造る人ぢやよ。お前、漢語でも教へて貰へ。』

　祖父、こんなこともいつてゐた。

　それ以来、私は、この王といふ支那人と仲よしになつたが、彼は私に、いろんなものをくれた。圓い箱に入た燐寸も貰つて、母への土産にしたし、赤文字の入つた、とてもおいしいお菓子も貰つたが、それは月餠か橘餠だつたらしい。それから、車掌が持つて歩くやうな、カンテラも見せて貰つたが、それはくれなかつた。それらのなかに長いこと私の寶になり藥になつたものは、香であつた。それは矩形の淡紅色の、金箔の浮彫の貌様のある塊であつたが、それは實にいゝ薫を放つていた。その香は美麗な琥珀色の羅の袋に入れられてあつて、房のついた、蝶結びの紫色の紐で、上衣の紐ににぶら下げるやうになつてゐた。

私は、とても、この香を愛したが、香を下げて歩くわけには行かない、香を下げるのは、女だけである。女も新嫁に限られてゐた。昔は舅や姑の前に出る時に、香を下げたのださうであるが、私が子供の時分には．銀の小刀や銀の筒（この中には耳掻き、楊枝、針などを入れる）や、勾玉などと一緒に、香嚢も年頃の女の子や、新嫁の飾として、胸に下げてゐたのであつた。それで、私のこの香も、母やその他の大人たちは、私が大きくなつて、嫁を迎へる時につかふのだといつたので、私は恥かしくて、下げようとしなかつたのである。この香は後でどうなつたか、私は分らないが、私が嫁を迎へる年になる前に、父も母もなくなつて家が潰れてしまつたから、おそらく誰かの手に入つたことだらう。

王さんのところへは、かなり香の注文があるらしかつた。私が遊びに行くと彼は、何かの塊りをやすりで擦つて粉にしたり、小さな摺鉢に松脂のやうな、砂のやうなものを摺り潰したり、してゐたが、それはいづれも薫りの高い香料であつた。注文を受けた香を作るのである。

乳香、沒薬、沈香、麝香といふやうなものを、私はこの時始めて見たし、ことばも覚へた。龍涎香といふことばも教へて貰つたし、私の郷里に出來る香木は、白檀と紫檀であるといふことも分つた。

香木は、舊家といふほどの家には一二本は植えてあつたものである。祠堂（先祖の廟）ある家は、その階の下、別に祠堂の建物を持たない家では、裏庭など清淨な地區に植ゑるのである。百年以上も経つた老香木があるのは舊家の誇でもある。私の元の家にもすばらしい香の老木があつて、私は隣の子供たちとその蔭で遊んで、家自慢をしたものだつたが、父の治産が悪かつたり、李道宰といふ觀察使（今の道知事に検事正、判事、聯隊長を兼ねたやうな職権をもつた役人）の時に、私の祖父に無實な罪を被せて、金を搾らうとした事件などで、私のとても好きなその屋敷を、泣く泣く人手に賣渡してしまつたのだつた。だからその自慢の老香木も今は人のものであるのである。

　香木は春先、一番香の高い時に、一本の枝が切られる。それを四五寸角位に切つて、蔭干しにする。それを祠堂の香箱に納めて置いて、祖先のお祭りの時には、それを取り出してマツチ軸位に削つて、香爐に炊く。そうすると煙を發する。その煙がゆらゆらと上るところは、蜜蠟の燭の點火とともに、もつとも虔敬な神秘な感情を唆るのであつた。私も、香案の前に跪いて、小さい手で、白磁の香爐に紫檀の香を燻べたことを記憶する。

自分の家に香木を持たないものは、人の家から辭を低うして頒けて貰はなければならない。それは、屈辱である。私たちの當時、住んでゐた家は、裏庭もなにもない酷いところで、私は香木を植ゑるところがないのを、この上もなく、殘念がつたものだ。私が今でも香を好むのは、子供の時の、この失はれた香木に對する愛惜の情が原因なのかも知れない。

祖父から聞いたのか、それとも父から聞いたのか知らないが、香は辟邪の力があるそうである。邪氣を祓ふといふことだ。その邪氣といふのはどんなものか私にははつきりしなかつたが、大方、悪い魔物たちのことだらうと思つてゐた。年頃の娘や、花嫁たちが香を佩ぶるのも、邪氣を祓ふためで、かういふ美しいものには、得てして邪氣が憑き易いと見られていたのだらう。

香のもう一つの力として、私は、かう聞いてゐた。香を焚けば善神が降臨したまふといふのである。しかし私の母方の祖母や、巫がやつてゐた、家や山の神々の祭には香は焚かなかつたので、私は、これはきつと邪神を祭るんだなと思つたものだ。

王さんは、隨分長く、祖父のところにゐたやうに思ふ。村や、隣の村の舊家や、一寸した成り上り連や、婚齢に達した子女を持つた人たちは、これはいゝ機會だと、盛んに香の注文をしてゐた。いふまでもなく、香には、三つか四つかの等級があつて、最高級のものは、百兩だと聞いたやうに記憶してゐる。私が貰つたものは最高級のものださうで、恐らく王さんが、祖父の家に留めて貰つたお禮であつたであらうと思はれる。

一體、この王さんといふ支那人が、何時祖父と知り合ひになつたか、私は知らない。王さんは、祖父を父上と呼んでゐたし、私にも叔父のつもりでゐた。しかし、私は一度も彼を叔父と呼んだことはなかつた。王さんは、細かい活字の本ももつてゐたし、墨もいゝのをもつてゐて、それも一丁貰つたやうに思ふ。便箋や詩箋なども、黄色や、眞紅や、梅、竹などの繪入りなどもつてゐて、書も、畫も、王さんは心得てゐるやうであつた。私は子供心にも、これは只の商賣人ではないと思つた。

さてその、王なる支那人が、何時どういふ風に祖父の家から去つたかは記憶がない。あれから、五十年近くも経つた今日でも、祖父を憶ひ出す時には、王さんが例のカンテラの明りに、香を捏ねてゐる像が眼に浮ぶ。異に因縁ではある。左様、王さんが今生きてゐる、としたら、八十に近い老人だらう。彼も支那のどこかで、私のことを思つてゐるのかも知れぬ。

渡守り

王さんのことがあつて間もなく、祖父は、三里計り西の方へ行つた、龍岩といふところヘ移つた。龍岩といふのは、ノガバオと呼ぶ渡場で、艾島[と]いふ島へ渡る渡船の發着するところである。南は渺茫たる黄海で、西の方に、艾島を首めとして、ツーリ、メチユラ、カムサギなどの島々が浮いてゐる。後は山で、海邊に一軒の家とお堂があるだけで、人家のあるところへ往くには、十數町の峠を越さなければならない、實に淋しいところだ。

この家を祖父は買つて、移つたのである。渡船もこの家についてゐた。祖父は何故、こんなところへ來たのか。私は、七八歳の時の事だから、その事情は分らない。多分、稼ぎがなくてはならないといふ、逼迫した經濟的事情が主であつたらうけれども、私は、さうばかりではないやうな氣がする。祖父が龍岩に移つて來てからの、やり方を見れば、益々、經濟的理由ばかりではなかつたことを裏書するやうである。

祖父は、例の潔癖でまづ家を修理した。室内は紙を貼る。庭を均らす。井戸を浚ふ。家の廻りを奇麗にする、といつたやうなことであるが、この家は見違へるほど立派な屋敷になつた。

裏の小山に倚つて、母屋があつて、庭一つ隔てゝ、客室があつた。客室といふのは、渡船の乗客の泊る、長い溫突間で、それは汚い部屋の標本見たやうであるが、祖父は、この部屋も紙を貼り、敷物のアンペラも新しいのに換へた。

祖父の座敷も、前の百姓家よりは、高くて廣くて、日當も風通しもよく、窓を明けると、黄海の波さへ眺められる、すばらしいものであつた。

『卜居此庄六六春』

と、壁に貼つてあつた聯を私は記憶するが、これで祖父が六十六の年に、こゝに移つて來たことが解る。私の七つの時だ。

祖父は、庶祖母明玉の甥の彌勒伊といふあばた面でのつぽの夫妻や、その姪、貴女と、貴女の夫、帝釋伊といふ、眞黒な、牛のやうな男を邑内から呼び寄せた。彌勒伊と帝釋伊とは、船を、婦たちは、臺所のことを受持つたわけである。

祖父は、今度は埠頭を築いて、客たちが、足を濡らさずに船に乗降することが出來るやうにし、今までは櫓で漕ぐだけであつたのを、新らしく、帆を作り、帆柱を立てた。帆は、赤土で染められて、目が醒めるやうな美しさであつたし、追手[[2]](#footnote-2)を帆に孕ませて走る渡舟の姿は、勇ましい限りで、絶讃の的となつた。彌勒伊はどうしても水は駄目であつたが、帝釋伊は間もなく一人前の船員になつた。彌勒伊は海を怖がつてゐるらしかつた。帝釋伊も、邑内育ちで、海に馴れない點では、彌勒伊と變らなかつたが、彼は命ぜられたことに忠實な質のやうで、何をやらせても實に一生懸命にやつてゐた。ところがこゝに悲劇の種子が孕まれてゐたのだ。

　祖父の眼には、よく働いてくれる方が、可愛いゝのは當然で、自然、彌勒伊は、一日置きに、祖父にどなられてゐた。

　『貴様は何も出來ないぢやないか』

と、あの大きな聲で、どなられると、彌勒伊は膨れて、自分の部屋に入つて寝てゐたが、このことは、いたく、私の庶祖母明王の神經を刺激してゐた。明玉は、自分の大事な甥を、私の祖父の歿後、この渡し場の後繼ぎにする肚であつたに違ひない。實際、それは可能であつたらう。何故かといふに、私の父は、あんなに貧乏のどん底に落ちながらも、金のことは分らない人であつたし、私の小父は父にも増して、無慾な人であつたから、彌勒伊さへ、よく働いて、祖父の気に入るやうにしてくれゝば、明玉はその手練で、寛大な祖父を思ふやうに動かせたはづであつたからである。

　彌勒伊だつてこのことを知らなかつたはづもないし、明玉から、懇々と説かれなかつたはづもないのであるが、彌勒伊といふ男がまた物慾のない男で、放蕩性を多分にもつているところへ、その妻といふのが、帝釋伊の從妹で、顔も心も帝釋伊にそつくりであつたから、彌勒伊の氣に入るわけがない。彌勒伊の妻は、帝釋伊に女の着物を着せたやうな、黒牛のやうな女であつたが、實にまめに働く。しかし、彌勒伊は、奇麗な女がほしかつた。邑内には、彌勒伊の氣に入る、華奢な女がいくらでもいる。かう思つたのだらう。

　これに反して、帝釋伊の夫婦では、妻の貴女が、帝釋伊を嫌つてゐた。貴女は、明玉の姪だけあつて、美しく、子供の私の目にも、牛のやうな帝釋伊の妻にするのは惜しい気がした。華奢で、眼が大きくて、明玉のやうに肌と齒が白かつた。彼女は、化粧も上手であつた。着こなしだつて、垢が抜けてゐる。ところが、身體が弱いといつては、よく寝てゐたが、私が見たところでは、別に病氣といふほどでもなく、働くことが嫌ひで、夜は夫と一緒に寝るのを避けるために、假病を使つてゐるやうであつた。その證據には、彼女は、晝間は、當前で、夕方から、頭が痛いとか、腰が凝るとかいひ出したし、時々、私の寝てゐる部屋へ、夜忍び込んでは、私の身體が潰れるほど抱きしめてくれたり、頬ずりをしたりした。彼女はあの時十七八であつたと思ふが、年よりは若くて、まだ娘々してゐた。

　この貴女が、帝釋伊を嫌ふことも手傅つて、明玉は、帝釋伊を憎んでゐた。

　　『あの黒牛のやうな馬鹿者を見ると、胸がむかむかする』

　明玉が、祖父の前で、帝釋伊の悪口をいふのを、私は何度も聞いた。さういふ時は、祖父は一寸不機嫌な顔をするが、何もいはず、眼を空に向けてしまふのであつた。

　私としては、帝釋伊の方が好きであつた。帝釋伊も私には愛想がよく、時々、暇を見ては、私を船に乗せて、漕ぎ廻つてくれたが、それは私には大きな樂しみであつた。彼は無口でもあり、また口下手でもあつたが、それでも、船を、靜かな入江などに着けては、面白可笑しい話をして、自分も笑ひ、私をも笑はせた。實際彼は、默々として働くといふ型で、年中、しやべり散らすといふことはなかつた。彼の唯一の樂しみは、美しい妻をもつてゐることであるが、その妻なるものが、どうも自分の懐のものになつてくれなかつたのである。

　海がしけたり、大雨になつたりすると、渡船は缺航になつて、宿には、十人も二十人も客が溜まることがあつた。その客といふのは、この地方の者は極少數で、多くは、渡り鳥の生活をしてゐる、船員とか、魚行商とか、艾島に集まる漁夫や、船員たちを相手の、商賣人で、たまには白粉をべたべたくつけた女客もあつた。私は夕飯後など、客室へ行つて見た。それは面白い風景である。

　雪の降る冬の夜など、殊に面白い。表に置くと、凍るものだから、濡れた草履をずらりと、室の片隅に並べる。雪の道だから、泥はついてゐないのだ。それから、鐡の火鉢には炭火が赤々と燃えさかつてゐて、その上には木萩やなんかで作つた、圓盤を天井から吊るして、バルカムギといふ、足までも引きくるめる、巻脚絆がかけられてゐる。干すのだが、それは、足の臭ひも雜つた、異様な臭気を發する。しかし、冬の宿屋では、どこも同じ風景であるから、この巻脚絆の乾く臭ひは、むしろ旅の情緒を唆る。

そして、客たちはのんびりと脚を伸ばして、話に耽ける。生涯を旅で過ごした彼等には、物語が多い。實際自分の體驗もあれば、旅籠屋で聽いたのもあり、たまには自分で改作したり、脚色したり、創作したりしたものもあるが、語る時には大抵、自分の經驗にしてしまふ。大部分は女の話で、聽くに堪へないものもあるが、必らずしも、そんな猥談ばかりではない。美しい人情談もあれば、武勇談もある。嘘八百とは知りつ、皆面白さうに耳を傾けて聽いている。そして内心羨ましがつたり、嫉んだり、憤慨したり、茶々を入れたりして、樂しんでゐる。彼等は皆一廉の詩人であり、小説家である。文人社會と同様彼等の中にも、駄作家があつて、面白くもない物語を長たらしく並べる。そうすると一人々々、顔を外方[に]向けて、眠つてしまふ。

彼等行商人は、多くは定住も妻子もなく、四十年、五十年乃至は六十年以上、朝鮮八道を歩き廻つた連中で、所謂負商といふものだ。背に物を負つて歩く商人といふ意味で、これはトンチムチヤンサと稱するものであるが、恐らく、朝鮮の歴史よりも古い階級であらう。これは、交通、交易機關の發達しなかつた時の商人群で、社會の一種の勢力をなして居り、彼の有名な大院君なぞは、自身、褓負商の大親分になつてゐた。

この階級には、特殊の意氣や、禮儀作法や、團結が發達してゐて、親分、子分、兄分、弟分といつた、義兄弟といふ組織は大變嚴しいもので、患難相救い、有無相通じてゐた。義侠に富み、金離れのよいことを誇りとしてゐたので、生涯資産を造ることはできない。

『足の裏に腫物さへ出來なければ』

『朝鮮八道を味噌を踏むように踏む』

『今日東、明日西』

『呼ぶところはないが、行くところは多い』

『行きあたりばつたり、畝を枕に死ぬ』

これはいづれも、彼等の意氣を示した格言である。

私が祖父の家で見たものは、大抵この類の者であつた。農村で育つた私には、かういふ人たちを見るのが面白かつた。

『手前旅錢が切れやして、宿賃が拂へやせぬがな』

出發間際に、祖父の前に來て、かういふものもあつた。

『さうか。よしよし。今度來る時には、きつと拂へよ』

祖父はその男をぢつと眺めて、げらげら笑ひながら、かういふのであつた。

『へいへい。ありがたうごぜえやす。今度といふ今度こそは、きつと拂ひやす。』

彼は、を肩にかけると、いと、足も輕く去つてしまふのであつた。

『あなた、そんなことで、どうなさいます。」

　後で、庶祖母は祖父に苦情をいふ。

　『ぢや、ないのをどうすればいゝのだ。』

　祖父はどなる。

　『あんな、乞食のやくざめ、この世でまた會へるものですか。擔車でも取り上げればいゝのに。』

　庶祖母は、怒り出す。

　『この世で會へなけりや、あの世で會へるぢやらう。』

祖父は、うるささうに、眼を空に向けるのであつた。

實際、祖父のやうなやり方では、掛賈ばかり殖えて、金が溜まるわけがなかつた。

　私は祖父のところへ來ても、十日以上留まることはなかつた。月に一回、或は二月に一回龍岩へ來たのであつた。私の父の家から龍岩までは、三里も離れてゐるし、それに、マガラ峠といふ、上下一里もある嶮しい峠を踰えねばならなかつた。これが、八つ九つの私には決して容易な一人旅ではなかつた。平地から行く道もあるが、それは、一里半も遠廻りをしなければならない。四里半といふ道は、尚更私には苦手であつた。父や小父は、お正月とか、祖父の誕生日など合はせて年に、二三回位しか、祖父を訪ねなかつた。祖父が本家である父の家に來なくなつたのは、十年も前からださうである。私の祖母が在世中も、祖父は、先祖の命日に一寸本家に來る位で、直ぐ邑内の妾宅に歸つて行つたさうである。それは皆明玉の差金だと、祖母は見たこともない明玉をとても惡んでゐたさうだ。

祖父六十一の本卦歸の祝だけはさすがに本家でやつたさうであるが、その後は、『孝子某老不将祀孝孫某敢召告于』と祝詞に書くやうになつて、祖父は、祖先の祭祀の時にも家へ來なくなつたのである。私の家は、五代の宗家で、毎月祖先の祭祀があつたのであるが、家が貧しくなるに從つて、親戚も參列しなくなり、七月二十二日の、私の高祖考[、]祖父から云へば祖考の命日を除いては、父と私と二人で、祭禮を行つたものである。どうしたものか、叔父が私たちの家に來たのを見た覺えはない。時折、祖父のところ、父や叔父が落合ふことがあるが、二人仲が悪いとも思はれない。叔父は變人であつたのではないかと私は思つて居る。

　ついでであるから書くが、叔父は、私に取つては謎の人物であつた。彼は、父よりは小柄で、弱々しくはあつたが、そのかはり、父よりも優雅な、貴族的な風丰であつたし、父の熱情的であるに對し、彼は何物にも動じない冷靜な人であつた。彼は妻が亡くなると、再婚しようともせず、家を畳んでしまつて、流浪の生活をするらしかつたが、それだからといつて遠い地方へ旅をするわけでもなく、四五里四方の域内の、友人のサラン（客室）を廻るらしかつた。それでも、私たちの家には立寄らない。凡そ、親類縁者のところには厄介にならぬぞといふ腹だつたと見える。いつもきちんとした、サンビ（文士、學者）の身装をしてゐて、貧しい放浪者とは、どうしても思はれない。殊に、その顔には、いつも、明朗な、冷靜な、世界に超然とした貴族的なところがあつた。叔父のこのやうな生活態度は今に解らない。それかといつて、彼は學者でも詩人でもなかつたし。また讀書家とも思へない。この叔父は、たしかに、不思議な性格の持主であつた。

　それは、たしか、晩春初夏の候であつたと思ふが、僕が九つか十、即ち明治三十四五年頃であつたらう。私は、久しぶりに、多分、お正月以後初めてだつたらう、祖父を龍岩に訪ねたら、祖父はいたくやつれて居つた。もう七十に近い老體のせいもあらうが、後になつて考へると經濟的に逼迫してゐたらしい。祖父の放漫な經營の崇りの上、バナザリといふ所に、他の奴が、新しい渡し場を設けたのが最大の原因である。バナザリといふのは龍岩から、一里半ばかり北、内陸にもつとも近いところで、艾島に行くのには、それだけ陸路が短縮されるわけである。水路の距離は、龍岩からより一里以上も遠いけれども、重い荷を背負つて、一里半も餘計歩いてまで、龍岩の渡し場に來る者もない。それで、祖父が折角の經營もバンザリの客を吸収することは出來なかつたのである。

　なるほど客室はいつもがらんどうで、渡し船も、全然空ではないけれども、満員も盛況はもう望まれぬ夢となつたし、掛を持つた奴は尚更、二度と龍岩を通らうとはしない。だから龍岩は淋れる一方であつた。私はバンザリの渡し揚を設けた奴に對して、大いに憤慨したが、何にもならなかつた。龍岩が、淋れるので、見切をつけたんだらう。彌勒伊は、とうとう逃げ出してしまつた。それを嘆いてか、明玉は、腰が曲り、元気がなくなつてゐた。

　しかし、彌勒伊に見棄てられた妻の、順女は、平気でまめまめしく働いていたが、泊まり客が少いから、働かうにも用事がない。そこで彼女は、籠を下げて、裏の山に登つては山菜を摘んで來たり、家の周囲の空地を鋤き返へして、野菜を作つたりしてゐた。たゞ貴女だけは、相變らず、痛い痛いといつては、遊んでばかりゐた。帝釈伊は、客は少くても、潮時毎に船は出さねばならぬので、相變らず忙しかつた。彼も船乗りになつてもう三四年にもなるので、船唄もいくつか覺えてゐて、私を船に載せては、好きな唄を歌ひながら、エツチラエツチラ櫓を動かしてゐた。

　『オヤドヤ、オオヒヨリ、オキヤチヤ』

といふ風に、元気一杯で歌つてゐた。彼は、美しい妻を傍に置いて男鰥ぐらしをしてゐる。私が、龍岩に行つてゐる間も、よく二人の寝室から、夜中に諍ひの聲が聞えて來た。その度に、貴女は、寝巻姿で泣きじゃくりながら、私の部屋へ跳び込んでは、私の蒲團の中に潜り込んで來るのであつた。私は子供ながらも、その意味が分るやうな氣がして、帝釈伊も貴女も二人共可哀想になつた。

　それから間もなく、籠が一丁、貴女を迎へに來た。恰かも帝釈伊が朝潮で、艾島へ行つた隙を覘つたやうに思はれた。籠舁ぎは、一通の手紙を祖父に渡し、祖父は、その封筒が諺文で書かれてゐるのを見ると庶祖母に渡した。

　それは庶祖母の兄嫂からの手続で、夫が病氣であるから、貴女をこの籠でよこしてくれといふのであつた。

　『兄さんが病氣ださうでございます。』

　庶祖母は、如何にもがつかりした顔付きで手紙の内容を祖父に告げた。

　『ふむ。』

祖父は、嘲るやうに、鼻を鳴らした。

『兄さんが病氣だといふのに、何が、ふむですか。』

　庶祖母の眼は尖つた。

　『貴女を連れていく口實だよ。』

　祖父は、空を眺めた。明玉も合點が行つたやうであつた。

　『貴女や。貴女や。』

　明玉は呼んだ。

　『はい。』

貴女はもうちやんと、着飾つて入つて來た。

『お父さんが、病氣ださうだよ。お前を迎へに來たんだが、お前は行くかい。』

『行くわ。』

『でも今行つちやいけないね。帝釋伊が歸つて來てからでないと。』

『いやよ。あの牛が歸つて来たら、放すもんですか。わたし今直ぐ發つわ。』

明玉も呆れてしまつた。

『お前、前もつて諜し合はせてゐるんだな。帝釋伊を裏切つて、他へ行かうといふのだらう。人非人奴。』

祖父は、貴女をきつと睨んだ。

『わたし、彼奴と一緒になる位なら、海に跳び込んで死んでしまひます。』

貴女は帛を裂くやうに叫んだ。彼の女は蒼ざめて、涙がぽろぽろ落ちた。

『行つちまへ。今に思ひ知る時が來るぞ。貴様の親も親だ。やつぱり種子が違ふ。』

祖父の眼は火を吐いた。私は祖父の、こんな怖い眼を見たことがない。ほんたうにぴかつと火花が散つた。

『種子が違ふ。はい、種子が違ひます。わたしたちは賤人で、あなたさまは兩班でいらつしやいます。ふむ。兩班。兩班だつて、あなたさまのお宅のやうに零落れてしまつちや、賤人にも劣りますよ。貴女や、わたしも一緒に行かう。私もこの兩班の屋敷に居られる身分ぢやないわ。あゝ、わたしは若く美しくして、この家に入つて、こんな猫背婆になつて逐ひ出される。』

私は、明玉のいつたことを皆記憶することも出來ないが、よしんば記憶してゐるにしても書くに忍びない。彼の女も長いこと、私の祖父のつれあひとして、勤めてくれた、庶祖母であるからである。

明玉が、いきり立つと、祖父は、黙つて、空を眺めるのが定法である。この日も同じ戰法であつた。

結局、貴女は、迎への籠で去つてしまひ、庶祖母は、酒を飲んで、おいおい泣いてゐた。

日暮頃、帝釋伊は、島から歸つて來た。彼が、眼で貴女を探してゐる様子が、可哀想だつたので、私は、彼を表の庭に呼び出して、貴女が、龍に乗つて行つてしまつたことを告げた。

帝釋伊は、がつかりして首垂れてしまつた。私は、祖父たちがいつたことまではいはなかつたけれども、彼はそれ以上聞かうともしなかつた。

貴女は母論、二度と龍岩へは歸らなかつた。貴女が外の男のところへ嫁つたことも、直ぐ知れた。このニユースはさすがに帝釋伊を憤激させたが、丈夫な人間の切創のやうに、一日一日と、直つて行つてしまつた。

或日、帝釋伊は私を船に乗せて、サトラ岩といふ岩島まで帆をかけて行つてくれた。この岩島[に]は、この邊一帶の鷗が止まる。

『鷗の卵取つて上げる。焼いて食べるとおいしいよ』

帝釋伊は、もう已に食慾が動いてゐるやうな顔をしてゐた。私たちの船が岩島の沙濱につくと、侵入者に驚いて、ぎやあぎやあと鳴き立てながら、左往右往してゐた。それは何百羽か何千羽か分らないほど多數であつた。或者は、私たちをその鋭い翼で、叩き除けようとでもするやうに、頭上すれすれに飛び廻つて、その體臭が私の鼻を衝くやうにさへ考へられて、物凄かつた。

私たちは引潮に乗つてこゝまで來たのだから、上げ潮で歸るのであるが、それまでには間があるので、鷗の卵を取つたり、蛤を取つたりして、遊んでゐた。帝釋伊は三十男であるけれども、よく子供になつて私と遊んでくれた。

『あの、あまめ。今どこに行つてゐるかな』

と、言つたり、拾つた蛤を岩にぶつつけては、

『このあまめ、へたばつちまへ』

と、呪つたりしてゐた。

『帝釋伊さん、もうあんな女のことなんか忘れなさい。今に、もつと、いゝおかみさんが來るよ。』

私は、子供の癖に、かういつて慰めてやつた。

『うん。もう忘れてゐるよ。あんな猫のやうな、子供も生めない、あまつちよなんか、何の役に立つもんか。』

帝釋伊は諦めたやうに笑つて居つた。

『帝釋伊。あの女好き？』

私はかうきいて見る。

『うん。好きでした。可愛いゝ奴だつたから。』

帝釋伊は、こんな矛盾したことをいつてゐた。

空は晴れてゐて、日光は、裸の身體を針先で、輕くつくやうに強かつた。弧形の水平線は、陽炎と波で、めらめら炎が燃えるやうであつた。メチュラ島が、かすかに、藍色に輝いてゐる。眞黑な帆をかけた水槽子（支那帆船）が、滑るやうに通つてゐた。

『もう上げ潮だぞ。』

帝釋伊は額に手を翳して、冲の方を眺めてゐた。水の光り工合で、潮の方向が分かるらしかった。潮招きや、その他の生物たちが、忙しさうに、物におびえたやうに、黒い泥の上を走り廻つたり、穴へ潜り込んだりしてゐた。

もう直ぐ歸り支度をしなければならない。

『さあ。牡蠣をもう少し食べなさい。岩の蠣は體によいでさ。』

帝釋伊は、岩にくつついてゐる牡蠣を、石で叩き潰しては私を呼んだ。私は、指先で、まだびくびくしてゐる、牡蠣の身を取っては食べた。

もう遊ぶことにも飽いて、私は船に上った。もう潮は、薄い裳裾のやうに、私たちの船のところまで匍ひ寄って來た。

鷗たちは餌を漁りに出かけた。彼等も、敵が歸り仕度をしてゐるのを知ってゐるやうで、もう、ぎやあぎやあ騒ぐこともなかった。

たうたう私たちの船は浮び上つた。ゆうらゆら、揺れるのがとても愉快で、私も、もう海が怖くなくなつたのだと得意になつた。此處が陸地までは一里もあらう。けれども、この岩島は、灣の入口を離れたところにあるので、余計絶海の孤島のやうな感じを與へる。それに、船に乗らずには來られないところだから、私のやうな子供には、この島は何だか神秘境見たいに思はれたものであつた。今日はそれを見たのである。

私たちの船は、サト[ラ]の岩島を離れて帆を上げたが、風がないので、帆はだらつとしてゐた。渡し場には、客が待つてゐるだらう。歸りを急がねばならないんだ。帝釋伊は、あの逞ましい腕に力を篭めて、左舷の櫓を漕ぎ出した。きいきいといふ音に合せて、船は右へ左へ、頭を振りながら進んだ。私は帝釋伊に教はつたとほりに、舵を取つてゐたが、それがとても嬉しかつた。一寸舵を捻ると、大きな船の方向が變るのが、ほんたうに面白かつた。

『さう、無闇に舵を動かしちや、船が進まなくなりますがな。』

帝釋伊は、笑つてゐた。

私たちの船が半途ばかり進んだ時、私は、異様な船が北方に向って進んで來るのを認めた。それは眞白な帆を掛けて居り、その帆の形も三角形であった。朝鮮の船なら、帆が赤いはづだし、支那の水槽子なら、黒いはづである。ところがこれは、何と、白くて三角ではないか。

『帝釋伊、あれ、あれ、あれ見て御覧。』

私は、覺えず、頓狂な聲を擧げた。

『うむ、どれ。』

帝釋伊は漕ぐ手を休めて、私の指す方を眺めてゐたが、彼も驚いたらしく、

『なるほど。妙な船だ。あんな船見た事ない。』

と、不思議がつて居た。

その、妙な船は、實に早かった。白い鷗が飛んで來るやうに、すつすつと、私たちの船に近づいて來た。

私たちは氣味が惡くなつたが、速力が鈍いので、逃げるにも逃げられない。

瞬く間にその船は、私たちの船に追ひついて、

「おーい」

と、聲をかけながら、私たちの船を遮るやうに、廻轉しながら、帆を下ろした。その船には黑い服を着た人が三人乗つてゐた。

私たちが呆気に取られてゐると、三人の中の、一番若く、顔の白い人が、手を上げて、にこにこしながら、

『こゝが龍岩か』

と、聞き取りにくい、妙な發音の朝鮮語で聞くので、私たちは、その敵意のないのを悟つてほっとした。

『さうです。龍岩があれです。』

私が答へると、その顔の白い人は、肯いて、何か白い包みを私に投げてくれた。あけて見ると、それは、丸い餅であつた。

『食べなさい。おいしい』

と、いはれたので、私は、一つ食べて見た。なるほどおいし。中には甘い飴が入ってゐた。始めて見る餅であった。

顔の白い人は、帝釋伊には、ヒーローと書いてある巻煙草を渡した。帝釋伊も私も、巻煙草を見たのは、これが最初であつた。帝釋伊は、おいしさうに、それを吸ってゐた。

二艘の舟は一列に並んで岸の方へと進んだ。あの船は、私たちに水先案内を頼んだわけである。

私は、何となく、

『あれは日本人だな』

と、思つたが、後で、それは中つてゐたことが分つた。

その船には『鷗丸』と書いてあった。私は、それだけは漢字で讀めたのである。

埠頭（私の祖父の大事業であるところの）には、十數人の客が船を待つてゐたが、私たちが、異様な船を連れて來るのを見て、皆、大きく目を睜つた。

私はもう、その顔の白い人と仲好しになつて、先立つて、彼を私の祖父のところへ案内した。祖父に引合はせたら、この船の謎が解けさうであつた。

洋服姿といふものを見たことのない祖父も、この人を見て、眼を丸くしたが、さすが、祖父は、肚が据つてゐて、驚くやうすも見せなかった。

その人は、祖父の前に踞くと、恭しく名刺を出した。『井上忠一』とあつて、その傍には、小さい字で、『大日本帝國廣島』と書いてある。名刺を出して彼が叮嚀にお辭儀をすると、祖父は、面喰つて、手を上げて、

『お辭儀をするには及ばぬ』

と止めた。これは、老人の禮儀で、答禮に値するものである。

それが濟むと井上は、何か喋つたが、自分の朝鮮語が、この老人に通じないと見ると、鉛筆と手帖とを出した。祖父は、井上の意のあるところを推測して、硯箱と巻紙とを井上の前に押してやつた。

井上は、一寸低頭して、自身硯箱の蓋を開けたが、私が墨を磨つてやつた。

井上は、巻紙を手に取ると、達筆で二三行書いた。私はその文句までは記憶してゐないが、自分は、商用で仁川から、沙河子まで行くものであるが、途中、食料と水が切れて御地に立寄つたのだから、よろしく頼むといふ意味であつた。

祖父は、それを見ると、まず點頭によって承知した旨を示し、ついで、筆を取つて、

『遠路無恙甚喜甚喜』

と書いて見せた。祖父は書家であるから、老筆ではあるが、實に見事な字であつたので、井上は大變感心してゐるらしかつた。

　井上は同行の、逞しい男に何かを命じてゐたが、やがて風呂敷包と一本の徳利を持って來た。酒好きの祖父は日本酒瓶を貰つて、子供のやうに喜んでゐた。

　祖父は、直ぐ盃盤を命じて、井上と對酌で飲んだ。私は、またお菓子を貰つた。

　祖父は取りあへず、白米一斗、小豆一升、鶏、卵十個を船まで運ばせてやつた。私は、井戸を教へてやつた。山の上の、御堂の井戸といふ、大變冷くて、おいしい泉を教へてやつた。

井上の船はその晩、龍岩で泊まつた。祖父は、家へ來て泊まるやうにと勸めたけれど、井上たちは船で泊まつた。夜中に、そつと抜錨して、附近の水深を測つたのであらう。

翌朝、井上は、また土産物を持つて、祖父のところへ來て、朝の挨拶をし、食料代を出したが、祖父は首を振つて受取らなかった。井上は、船までついていつた私に、他の贈物と一緒に、一冊の本をくれた。『弓場重榮著、日語獨學』と表紙に書いてあつた。

　井上の船は、晝潮で、龍岩を發つて、沖の方へ出ると思つたら、灣内深く、北の方へと進んで行つた。

やがて、不思議なことが發見された。龍岩の頂上が眞白に塗られてゐることである。

『はて。不思議。誰の所爲だらう。』

これは大變な謎になつた。船で灣内を航行するものは、龍岩が一夜の中に白くなつたのを、神業のやうに不思議がつて、さてこれは、吉兆か凶兆かと、首を捻ってゐた。

　『サナガ岩も白くなつてゐる』

といふ噂が立つた。サナガ岩といふのは、サナガ浦といふ、船着場の後の山の額にある岩で、邑内から、もつとも近い港である。

いよいよ民心は恟々とした。

『今に戰爭が起るぞ。日本とロシアと戰ふのぢや。』

さすがに祖父は正確な斷案をおろした。龍岩を白く塗つたのも、サナガ岩を白く塗つたのも井上の所爲ぢや、と祖父は斷定してゐた。それより二年後、日露戰爭が起つて、日本の一隊はサナガ浦に上陸したのであつた。

長篇小説　四十年（第2回）[[3]](#footnote-3)

島の生活

　祖父が何時、龍岩を引上げて、艾島へ移つたか私は知らない。父たちにも通知はなかつたのであらう。

　艾島といふのは周圍五六キロもあらうといふ、西海上の小島で、本陸から五六キロ離れてゐて、春から秋にかけては、蛤、ぐち、ひらめ、えびなどの漁場として、相當賑はふところである。住民は百數十戸もあつたらう。職業は漁業、飲食店が主であるが、物騒な世相を避けて、隱れてゐる者も數人居た。

島は、直角三角形をなしてゐて、その底邊が、本陸の方へ、他の二邊が黄海に向いてゐる。一連の山が黄海からの風を防いでくれるので、弓でいへば弦に當る。東岸は、格好な船着場になって居る。しかも、海岸の直ぐ前を、タラナ水道が通ってゐて、潮汐干満の差が少い。東南端のサトラ崎といふのが、中心の漁港であるが、東北端のサバラ濱の方が、もつと賑やかで、いはゞ歡樂郷見たいになつて居る。そこには、居酒屋や、船宿や、怪しい女の家や、雜貨店や、巫の御堂やがあつた。祖父の島の家は、この中の、一軒の小さな藁葺であつた。南向で、入口が、東に向いてゐて、入口を出れば、貝殼の粉で、土は殆ど見えない、海岸傅ひの道路があつて、その道路の向側は、砂濱につゞいて海であつた。祖父の家では床についてゐても波昔が聞えた。海が荒れた晩など、枕元まで海が襲つて來るやうであった。

　帝釋伊も、その妹の順女も、もうゐなくて、祖父と庶祖母の明玉と二人きりの、暮らしであつた。それほど經濟的に逼迫してゐたのだらう。それでも、祖父は、相變らず、のんきであつた。例の座布団に半跏趺を組んでは、禪僧のやうに、いつまでも坐つてゐた。時々長い煙管で煙草を吸つたり、日に一回位、晝寢の高鼾を掻いてゐた。

　『鼾が高くて、耳が痛いぢやありませぬか。』

　明玉は眉を顰めた。彼女は益々腰が曲つて、衰へてゐた。

　祖父は、儒者の冠を棄てゝしまつて、メジという吏屬階級の帽子を被つてゐた。彼は、『島の者』になり終つたつもりであらう。

祖父の佗しい島ずまひにも、時々來客はあつた。島へ遊びに來たついでに、一寸立寄るといつた者の他に、恩誼や友情を忘れないで、態々尋ねて來る者もあつた。さういふ人たちは、洒や肉や、果物や、或は藥材などや、何か土産物を持つて來ては、祖父を喜ばせた。この澆季にも變らぬ人情を、祖父はしみしみ喜ぶものゝやうであつた。

　かういふ客が來ると、庶祖母も喜んだ。

『こんなところまで、わざわざお越し下さって』

と、泣かむばかりに感謝するのであつた。

祖父は、これらの裕福な來訪者に、決して自分の窮状を訴へるやうな、意気地のないことはしなかつた。彼はどんな場合にも卑屈ではなかつた。無邪気であるが、昂然たる態度は失はなかつた。

もし、祖父が、折入つて頼んだら、この生活の窮状を打開する道もあつたであらうが、祖父は、それをしなかつた。

『一體、あなた、どうなさるつもりですの。もう、貯蓄も後いくらもないんですよ。』

明玉が、かういふと、祖父は、

『食べるものがなくなつたら、食べることを止めるまでのことぢや。』

といって平気であつた。

しかし、背に腹は換へられなかつたのだらう。或は、明玉の意見に祖父が、默從したのかも知れぬ。祖父は酒屋を始めた。大きな甕を三つも次の間に入れて、それに酒を醸造するのである。それから、納屋に床几を置いて、それを酒場にした。何でも器用で念入屋の祖父のことであるから、祖父の家の酒は名聲を高めた。私もずつと見てゐて、よく知ってゐる。祖父は、上等の麹を仕入れた。高梁や、粳米もすべて上等なものを使ひ、蒸溜の時も量を貪らず、ぐっと度を高くした。

『家の酒は天下一ぢや。天下一でなければ金を取らぬ』

などゝ祖父は客に自慢してゐた。

明玉は張り切つて、肴をつくつたり、客をあしらつたりしてゐた。

しかし、祖父が酒屋の親爺になつたことは、私ばかりでなく、多くの人を悲しませた。酒屋は卑しい商賈で、士大夫のなすべきことではなかつたのである。

酒屋を始めてから、祖父の家は大變賑やかになつた。朝早くから夜遅くまで、漁夫や、船乗りたちが入り浸つて、騒いでゐた。それらの船乗りの中に、一人、年の頃五十にもなつたらう、背も高い、鬚をはやした男があつた。潮風で、顔は黑いが、その眼付きといひ、話しつぷりといひ、どこか上品なところがあつた。彼はしばしば、祖父のところへ酒を飲みに來てゐたが、そのたびに、祖父の部屋へ來て叮嚀に挨拶をして歸るのであつた。

『あれは隱士ぢや。』

祖父は彼のことを、かう評してゐた。

私はその時、中庸の素讀をしてゐた。例の男は、祖父に挨拶をすると、次の間に來て、私の本を覗いてゐた。

『致中和天地位焉萬物育焉』

といふところを指して、彼は、私に、

『この意味、知つてゐるか」

と問ふのであつた。

又、

『夫誠者天之道也誠之者人之道也』

は何んな意味かなど聞いた。私はどう答へたか忘れたが、彼は、私の背中を撫でゝ、

『誠哉誠哉誠者幾希也』

と紙切に書いてくれた。

私は、後で、それを、祖父に見せると、祖父は、眼を大きくして、

『さうぢや。隱士ぢや。市に隱るゝ者あり、船に隱るゝ者ありか。』

と、呟いて、首垂れるのであつた。

『世の中が乱れゝば、賢人は皆隱れるのぢや。獨善其身といふ。お前は――』

といひかけて、祖父は、そのまゝ口を噤んでしまつた。

それ以後、私は、祖父も隱士かな、と思ふやうになつた。

祖父が、『お前は――』といひかけたことは何んであつたらう。それが知りたかつたが、私は、祖父に聞くだけの勇気はなかつた。

私は、どういふわけだったか、祖父の島の家には比較的に長く滞在してゐた。こゝで書堂（寺小屋）にも通つてゐた。この書堂では、私は、年は十一で、年少者であったが、學力では、二番目であつたので、先生の次の席が、Ｍといふ、もう二十歳にもなつた接長（級長）、その次が、私であつた。Ｍはもう結婚してゐて程子冠といふ、三角山のやうな冠を被つてゐた。とても落着いた、やさしい人で、この島の人間とも思はれなかつたが、後で、これも隱士の子、と解つた。私は、この人の家に呼ばれて、その隱士といふ人にも逢ひ、御馳走にもなつた。

『世は末世ぢや。何時昇平の世の中を見ろことやら。唯聖人の道を守つて、性命を全うすることぢや。』

そのＭといふ隱士は、息子や私を前にしてそんなことをいつてゐた。彼は誠に質素な麻服を纏ひ、書齋には、古風な文房具や、書籍や七絃琴などを備へてゐた。彼はこゝで日夕、西海の荒波を眺めては、瞑想に耽けるらしかつた。島の人たちは、彼の人となりを知る由もなく、唯一寸した金持の樂隱居と位見てゐるやうであつた。

私は、今の世は亂世であることをよく知ってゐた。無知な、私の母でさへ、

『もう末世だ。今に世の中がひつくりかへる』

と口癖のやうにいつてゐた。

『もう李氏五百年の運が盡きたのだ。』

『今に大きな戰爭が起るぞ。そして十里に一人位生き殘るぞ。』

百姓たちが、畑を耕しながらも、こんなことをいつていたし、酔拂ひどもゝ、

『後いくらもない世の中や。飲まぬで何んとせう』

など、いつては、底抜騒ぎの言譯にするのであつた。

『土雨三年、灰雨三年、油雨三年』

こんな童謡があつた。春先など、埃つぽい大陸風が吹いて來ると、

『それ、土雨だ』

と、本気になつて、母は恐れてゐたものである。終末つて、どういふ終末か知らないが、百姓も、漁夫も、この世の中には終末が近づいてゐるものと思ってゐた。

人民が、かう思ふのも無理はなかつた。

ヲンニムといふのは郡守のことであり、カムサとは、道の長官のことであるが、この人たちの唯一の仕事は、地方の金持を引張つて、拷問にかけて、金を搾り出すことであり、殺人犯でも、中央要人や、地方官に賄賂さへ使へば、無罪になるのであつた。私は、この事件を目撃してゐる。それは、上にも述べた、白一齋先生の塾で起ったことだ。林といふ學生が、李といふ學生を叩き殺した。殺されたものゝ死體は、加害者の家に移されて、村の者が日夜番をしてゐた。郡守が、檢事といふ格で檢視に來て、無冤録（昔の法醫學）にある通りの檢査をした。その結果一點の疑もなかつたのである。にも拘はらず、林は無罪となつて、堂々と、私たちの書堂に來て、接長になつたので、私たちは同盟休校をして彼を背斥したものである。

『自分が十萬兩も出して、郡守になつたのだから、二十萬兩は稼がなくちや。』

人たちはヲンニムの貪慾のことを、かういふ風に説明するのであつた。

『末世ぢや。末世ぢや。』

が、民衆の口癖になるのも無理はなかつた。

それに、かの龍岩が、サナガ岩の白塗である。いよいよ終末が近づいたと思ふのであつた。市に隱れたり、島に隱れたり、酒に隱れたりするものがあつたのもそのためであつたらう。

私にも、終末といふことが、一種陰鬱な壓力をもつて、犇々と身に迫まつて來るのを覺えた。

『こんなもん讀んで何になる。』

書堂で、子供たちが、訓長（先生）がゐなくなると、こんなことをいひ合つた。勉強をしても、出世する希望がないといふのである。

四月も半頃になって、ぐち船が、島へ戾つて來た。ぐち取りの船は、タリ船といつて、一番大きな船であつた。船主、サゴン（船長）の外に、ヲンヂヤン（會計）、ホワヂヤン（賄係）など、四十人ものトンモ（船員）が乗り込むのである。かういふ大船は、この島にも多くて三艘以上入ることはなかつた。今年は大漁だといふので、船は青や赤や、五色の幟で飾られて、盛んな太鼓を鳴らしながら入つて來る。それは實に威勢のよいもので、この光景を見た人は、おれも來年は、タリ船を買つて、船主とならうといふ氣になるものである。

船が濱に着くと、船主は、新調の服を着飾つて船前に立つて、皆の、祝賀に答へる。この日の船主こそは、王者だ。誰もが羨望の眼をもつて、彼をあがめるのである。

船主の次はサゴンだ。彼は、海で鍛へ上げられた勇者にして智者で、彼は、空に現れる一つ一つの雲の意味を讀み、そよ吹く風の心をも知つてゐるのである。海のことなら、わが家の如くで、どこそこには、ぐちが通り、どこそこには、暗礁があり、どこそこの離れ島には泉が湧くといふことを知つてゐる。そればかりではない。彼は、四十人五十人の、荒々しい船員たちを、荒浪を御するやうに、御しなくてはならない。唯彼には金がないだけである。彼は、一匹の男であるから、宵越しの金を持たぬ。多くは、妻子も家も持たぬ。稼いでは飲み、稼いでは女を買つて、五十臺まで生きて來たのである。

私の祖父のところに來る、あの隱士も、かういふサゴンの一人であつた。しかし、サゴンが皆隱士といふのではなく、たまたまこの隱士がサゴンになつたまでのことだ。

この隱士サゴンが乗り込んだ船が、濱に着いた時には、祖父も迎へに出てゐた。船主は冠を被り、禮服を着けてゐるが、わが隱士サゴンは、鉢巻の結び目を横つちよにして、何んの變哲もない、船乗のやうな顔をしてゐた。

彼は、祖父の前に進むと、急いで、鉢巻を取つて、賤人が貴人の前でするやうに、腰を屈めた。その晩、隱士サゴンは祖父に呼ばれて、夕飯と酒の御馳走になつた。祖父は、しきりに酒を勸めて、彼を友人扱ひした。彼も快く飲み且つ語るのであつた。彼は、海上でものしたといふ、幾首かの詩も書いて、祖父に見せたが、祖父は、その中一二首を、自身で吟じて、膝を打って讃めた。それでも隱士サゴンは、その素性を語らなかつた。祖父も、それを聞かうともしなかつたが、「海隱」といふ號を與へたら、彼は、喜んで頂戴するといつてゐた。その號と共に、祖父は、酔眼朦朧として、一絶を書いて渡したら、彼は襟を正して、それを吟ずるのであつた。なかなか、いゝ聲であつた。

隱士サゴンは、サゴンとしても名が高かつた。秋になつて、来年の、タリ船の準備時期になると、名サゴンは引張り凧になるのであつたが、彼はその中でも、もつとも引張られる方であつた。そもそも船主といふのが、概ね、一年限りのもので、十中の九は失敗して投げ出し、成功した一人は金が出來たから止めるといふ風であつた。だから、サゴンとしては、毎年、新らしい船主に傭はれねばならなかつたが、その船主といふのが、大地主のどら息子か、さもなければ、大山師かであつて、罷り間違つたら、サゴンたちは骨折損で終る場合もなくはない。

隱士サゴンは、給料では動かなかつた。船主に會つて見て、意気投合すれば承諾するといふ風であつたが、彼は、何かの機會に、祖父にかういつてゐた。

『船主に仕へるのも、君主に仕へるのと同様でしてね。徳のない船主に仕へると、必らず不幸が來ます。天は徳あるものに與しますからな。それが顔にちやんと現れて居ります。ところが、世が衰へると、徳あるものが、中々見當りませぬ。』

彼は溜息をつくのであつた。

『一船を治むる尚一國を治むるが如しか。』

祖父がかういふと、隱士サゴンは、

『正に、そのとほりです』

と、苦笑しながら、肯いてゐた。

私は、これらの對話が忘れられなかつた。

『おれは將來、どうせう』

といふ惱みが、段々深刻になつて行くのであつた。

或日、私は、例の隱士のＭ家に祖父と呼ばれて行つた。麗らかな五月の朝まだきであつた。（朝鮮では、朝飯に客を呼ぶ習はしであつた。）祖父は、長い杖をついて、ゆっくりゆつくりと歩いてゐた。滅多に外出することのない祖父は、青空に浮いてゐる白雲や草の青みを、思ふ存分樂しんでゐるやうであつた。

私は祖父と一緒に道を歩くのは、今度が始めてだつたので、物珍らしげに、また懷しげに、祖父の歩く姿を見ながら歩いた。祖父の身體は、實に偉大な感じを與へた。どつしりして、千鈞もありさうであつた。外股に歩くその歩みは、一足一足、づしんづしんと地軸を揺がすやうであつた。私は、こんな立派な風丰の祖父の孫であることが嬉しかつた。この世の中に誰も、祖父のやうな立派な人はないやうな気がした。ゆつたりとしてゐて、しかも儼然たるところがあつた。部屋の中に於ける祖父よりも、何層倍偉大な感じを私に與へた。

『しかるに、何故祖父は、こんな島の中で酒屋なんかしなくてはならないのだらう。』

と思ふと、私は情なくなつた。

『さうだ。祖父さんは隱れてゐるのだ。島に隱れ、酒［に］隱れてゐるのだ。英雄、時に遇はなかつたのだ。』

私は、かう考へ直して、満足した。

祖父は、坂の頂上に上がると、

『ふう』

と、長く息を吐き出してゆらゆら扇子を動かしながら、西海の渺茫たる景色を眺めてゐた。山の頂上に立つて、大海を望む、祖父の姿は、まことに祖父にふさはしいと思つた。今考へても祖父にはたしかに飄逸として、世俗に染まらず、何物にも累せられない風度はあつたと思ふ。

頂上からは、Ｍ隠士の家が眺められた。山と海岸との間は相迫つてゐて、Ｍの家のサラン（書齋）は、直ぐ、激浪に噛まれる、亂岩の絶壁の上に簷を差出してゐる。しかし、家の南の方には、一寸した平地があつて野菜畑に續いて、麥が黄く熟して居り、甚だわづかではあるが、水田もあつた。

主人は、祖父を認めたのであらう。麓まで迎へに出た。もつとも、私たちはMの息子に案内されて來たのであつたが。

主人は、儒者らしく、衣冠を整へ、儒者らしい、揖の禮をした。祖父は、年長者であつたので、杖で體を支へたまゝ、口だけの答禮をするのであつた。

案内された、サランは、天井の低い二間續の部屋で、襖で仕切られてゐて、その焚口に近い方が主人席であり、上席であつて、低い山水畵の屏風が廻らしてゐたが、祖父は、その上席を勸められた。これは師か長者に對する禮遇で、最高のものである。祖父は、一應辭退したけれども、素直に上席についた。主人は、長者に侍する年少者、又は門人の禮をもつて祖父をもてなした。ちやんと跪坐して、煙管に煙草を詰めて、真鍮の火鉢の火で、火をつけて、一口自分で吸って、吸口を袂で拭いて、兩手で祖父に差し上げると、祖父は、寛いだまゝで、それを受けて、

『おう、これは、いゝ煙草ぢやのう』

と、お世辭をいうた。

祖父は、欄干に凭れて、海景色を眺めたり、屏風の繪や、壁や襖に貼られてゐる書を見たりしながら、その場その場に適切な批評をしてゐた。主人は、祖父の評言を聞いては、喜ぶ表情をした。

『尊丈。金秋史の屏風があります。後で、お目にかけます。』

主人はいさゝか得意であつた。

『おう。秋史の書を蔵して居らるゝか。それを拜見することは何より御馳走ですわい。』

祖父は煙管は、放していつた。これは、秋史に敬意を表する意味である。

　間もなく、膳が運ばれた。

『君は、奥へいつて、僕と相膳で食べよう。』

若主人はかういつた。

若主人は、この部屋に侍立してお酌をしたりお給仕をしたりして、食事の終るのを待つてゐなければならない。私はお腹が空いてゐたので、困つたな、と思つた。唯頼みになるのは、祖父の機宜の措置である。

『お前たちは下れ』

といふことである。

若主人が一献二献とお酌をしてゐる間、私は、そつと部屋を抜け出し、庭を歩きながら、海を眺めたり、枝も撓はに熟してゐる、杏の樹を仰いだりしてゐた。大きな桐の老樹が、紫色の花をつけて、薫を放つてゐるのがとても氣に入つた。

父の家の庭にも、一本梧の木が立つてゐたが、まだ若いせゐか、花は咲かなかつた。父は、

『鳳凰非梧桐不棲。不竹實不食。』

といつたり、いい琴は、石上松と梧桐腹板でなければ出來ないといつてくれたりしたので、私は、梧に關しては、一種の愛着をもつてゐた。

室内からは、談笑の聲が聞えて來た。祖父の大きな、傍若無人な笑聲が、しばしば起つた。

私が桐の花に見惚れてゐると、若主人がいつの間にかやつて來て、後から兩手で私の眼を塞いだ。

『知つてる、知ってるよ』

と、私がいふと、彼は、私の眼から手を放して、

『君、探したよ。君は桐が好きか』

と、笑つてゐた。

『うむ。大好きです。』

『僕も、好きだ。桐はいゝな。さあ行かう。飯食べよう。』

彼は私の手を曳いた。

大きな板の門を入ると中庭で、犬や鶏や猫がうようよしてゐた。犬は私を見て、齒を剝き出した。一聲二聲威かしたが、若主人が、

『こら』

といふと、すぐ默つて、私を見凝めてゐた。

入つたのは、内房の中でも、若主人夫妻の部屋だ。温突に近い方が、親の部屋でその次ぎの間が、子供夫婦の部屋といふことに、この地方では、なつている。箪笥の丹塗りも、まだ新しいし、真鍮の盥や、尿器なども、ぴかぴか光つてゐて、壁には、桃色や、萌黄色の若い嫁の着物がかゝつてゐる。如何にも花嫁の部屋らしい、うひうひしい感じだつた。私の家には、若夫婦がゐないので、こんな感じを味はふことは出來なかつたのである。

私を、その部屋に案内して置いて、若主人は出ていつたので、私は手持無沙汰をして、あれやこれや見廻はしてゐると、若主人が、中年の婦人と一緒に入つて來た。

婦人が座に就くのを待つて、若主人は、

『李君、僕の母だよ。君に逢ひたがつてゐる』

と紹介したので、私は、手を突いて、お辭儀をした。

婦人は、私の頭や背中を撫でたり、年はいくつかとか、いゝ顔をしてゐるとか、眼がどうの、手がどうのと、愛撫の意を表してくれた。私は嬉しかつた。私は家が貧乏になつてからは、親類のところにも、あまり行かないやうになつたし、また、たまたま行くにしたところで、亡びかゝつた家の汚い装をした子供を、心から歡迎してくれる人もなかつたのである。男の人たちは、それほどでもなかつたが、婦たちは、殊に、私に冷淡であつた。だから、Ｍ夫人の、思ひがけないこの愛撫が、身に沁みて、ありがたかつたのである。

お膳を運んで來たのは、一見して、若主人の妻であつた。この田舎では珍らしく薄化粧まで施してゐる。どうも農村育ちではないやうな、垢披けのした、奇麗な女であつた。

私たちは、食べ始めた。食器も、銀かと思はれるほど磨かれた真鍮の十二礫であるし、箸や匙は、ほんたうの銀であつた。黝んだ丹塗りの八角膳に大小十四の食器が、ずらつと並べられた様は、實に見事であつた。十二であるはづだが、若主人と私と相膳なので、飯椀[と]汁の椀が二つ餘計つくわけで、それで十四である。

　Ｍ夫人は、自分で食器の蓋を取つたり、私に、これを食べて見よ、あれはどうだらうと、勸めてくれた。御馳走もおいしかつた。貧乏人の子の私としては、勿體ないほどであつた。

　略食事が終りかけると、十五六にならう、一人の娘がスンニユン（おぶ）を運んで來た。顔付きで若主人の妹と解つた。彼女はスンニユンの椀を一つは私の傍、一つは、若主人の傍に置くと、恥かしさうに、俯きがちで、出て行つた。色は海風に吹かれたせゐか、白い方ではないが、眼と鼻が私の眼を引いた。美しい娘だと思つた。私が見たすべての娘の中で、一番美しいやうに思はれた。私の小さい方の妹が大きくなれば、あの娘のやうに美しい娘になるだらうか、など考へた。私は、大きい方の妹よりも、まだ三つの小さい方を可愛いがつてゐた。

　私は陶酔したやうな氣持ちになつた。Ｍの家は何と幸福な家庭だらうと思ふと、自分の家の、索莫、荒涼さが、一層目立つて情なくなつた。今、父の家には、襤褸を纏つた母が、二人の女の子を連れて、朝飯にもありつかずに、困つてゐるのかも知れなかつたし、その建物も、建てかけて、途中で止めた形で、あるべきものが半分も揃つてゐなかつた。祖父の家では、腰の曲がつた庶祖母が、船乗を相手に酒を賈つてゐることだらう。かう思ふと、私は、堪らなくなつた。私は、自分は乞食に等しい身の上であることを、まざまざと見せつけられたのだと思つた。實際、私の着物は、お話しにならないほど、むさくるしいものであつた。寸法は合はない。穴は明いてゐる。汚れてはゐる。ことに、私の足袋は、泥だらけであるばかりでなく、底が破れて、足の裏が窺いてゐた。

　そこへ、一層、私を堪らなくしたことが起つた。それは、若主人の妻が、お膳を下げると、入つて來て、如何にも馴れ馴れしく、

　『坊ちゃん、済みませぬが、一寸お立ちになつて』

　なんて、いつたので、私は、仕方なく、いはれるまゝにしたのであつたが、それが、私の着物の寸法を取るのだといふことが解ると、

　『僕歸る』

と、いひ出した。それ以上、私は、その場には居たゝまらなかつたのである。私は顔は火照つたし、胸は騒いでゐた。

　『何をいつてゐるんだ。祖父さま、まだお歸りにならぬぢやないか。そんなこといはないで、魚釣でもしよう。今日は書堂の先生、御病気で、休みだよ。さあ、行かうや』

若主人は、私を引張つて、海邊に出た。海邊といつても直ぐ庭續きである。若主人の手には、釣竿や、餌包があつた。

　私たちは大きな岩の上に坐つた。風はないのだが、外海に面してゐるので、うねりの大きい波が、岩壁をぶつけては砕けてゐた。

　海を見ると、私はいゝ気持ちになった。もう、さつきの、くしやくしやした気持が、輕くなつてしまつた。

　『海はいゝなあ。君、海好きか』

　Ｍの若主人は釣は垂れようともしなかつた。

　　『うむ、好き』

私は、帝釋伊とサトラの岩島へ行つたことや、歸りに白い帆の船に會つたことや、井上のことなど話した。

『さうか』

　Ｍの若主人は、私の物語に耳を傾けてくれたので、私は嬉しかつた。

　『さうだ。さうだ』

　Ｍは、一人で、首肯いてゐたが、

『だからね。今に見たまへ。間もなく、世の中が變わるぞ。論語や孟子なんか讀んでたつて仕方がないんだ。もう、そんなものに用はないんだ。用がないといふわけぢやないけど、あんなことだけでは駄目だよ。何か、どえらい學問をしないとな。』

こんなことをいつてゐた。彼のいつてゐることは、私にも解る。解るといふよりは、彼のいつてゐることは、丁度。私がいひたいことであつた。

『どえらい學問つて、どんな學問かな』

私は、ませたことをいつた。

　『おれにも分らぬよ。分らぬけれども、京城にでも出ていつたら、分りさうな氣がする。君おれと一緒に京城へ出ないか』

Ｍの若主人は、突如こんなことをいつた。十一歳の私は、いまだかつて、八百八十里（朝鮮の里數）の京城へ出ようなどゝ、大それた考へを起したことはなかつた。

　私は、出ようとも出ないとも、答へなかつた。母が居るから、そんな遠くへは行かれないやうな気がしたのである。父がゐなければ、私が生きてゐられないやうに、私がゐなければ母は生きてゐられないやうな氣がした。あんな不愛想な母なのに、私は、さう信じてゐたのである。

Ｍは、しばらく、物想ひに沈んでゐたが、

『君、僕好き？』

と、私を見凝めた。彼の眼は、如何にも熱情に燃えてゐるやうであつた。

私は、照れくさいから、たゞ首肯いて見せた。私はほんたうに彼が好きであつた。私も、たつた一日でよいから、Ｍのやうな幸福の中に住んで見たいと思つた位だから。

『ありがたう。僕たち兄弟にならうね。』

Ｍは、私を抱きすくめた。

私は、幸福を感じたが、何もいはなかつた。

『君。僕の妹見たらう？』

『うむ』

『どうだ。彼の子好きか』

私は、この意外の問ひに面喰つて、顔を赤くした。

『いやか』

Mは畳みかけた。

『[うう]ん』

私は、Ｍの妹が、いやなどころか、大好きだつたから、苟且にも、いやだ、なんて、いふことは出來なかつた。

『ぢや好きなんだね？』

私は、默つた。しばらくしてから、私は、

『君の家の人は、誰も彼も皆好きだよ。家も、桐の木も皆好き。』

かういひ切つた。

その日は、それで、祖父も、いい氣持に酒に酔ひ、私も、胸をどきつかせながら、歸つて來た。

私は、毎日、書堂で、Ｍの若主人に會つたが、平常の通りで、何の變つたところもなかつた。

ところが四五日してから、書堂の先生が、暴死してしまつた事件が起つた。それで、書堂は休みになつて、若いＭは、父Ｍの懇請で、毎日、朝早く、祖父のところへ來て、祖父から、詩經と書を學ぶことになつた。お蔭で、私も中庸から、一躍詩經を讀むことにした。

『關關雎鳩。在河之洲。窈窕淑女。君子好逑。』

なんていふのがとても好きで、聲高々に誦したものである。面白いものだから、私は、一日百行も、或日の如きは二百行も諳誦したので、祖父も驚いてゐた。

『こいつ。詩經を一日二百行も諳誦する。』

祖父は、得意になって、私のことを自慢してゐた。

若いＭと私とは、祖父から、意味を教はると、Ｍの家に行つた。そこで、一日中、温習をしたり、海邊で遊んだりして、夕方、私は、一人で、祖父の家に歸るのであつた。Ｍ家では私を可愛がつてくれたし、大好きな、Ｍの妹には會へるし、私は幸福の絶頂にゐるやうな氣がした。

私は十一、Ｍの妹は十五であつたが、私は、戀みたいな感じを抱いてゐた。あの娘といつも一緒に居られたら、どんなに幸福だらうと、夢想してゐるのであつた。しかし、父が金議官に、

『貴様の娘を、伜の嫁にくれ』

と、申し込んで金議官から、

『貴様は、おれの娘を餓死させる氣か』

と、傲然として、撥ねつけられたことを記憶してゐる私だ。Ｍの妹と結婚することなんか思ひも寄らぬことであつた。Ｍが素寒貧の私に、大事な娘をくれようはづはなかつた。

或日、意外なことが起つた。父のＭが、若いＭと二人で、祖父の家へ來た。若いＭと私が、前日の分を、祖父の前で諳誦したり、意味を聞かれたりするのを、父のMは満足した顔で、傍で見てゐた。私たちは、今日の分を一應讀んで、祖父から二三の點について、注意を受けて、次の間へ下つた。もう、私たちは、いつものやうに、Ｍの家へ行けばいゝのである。

『さあ、行かう』

と、私が、大きな詩經の本を、小脇に抱へて促がすと、若いＭは、手で諜して、私に坐れといふ。私は、何気なく坐つた。もう六月だけれども、島の朝の空氣は涼しかつた。

『今朝、お伺ひ致しましたのは、先生にお願がありまして』

Ｍ隱士は切り出した。

若いＭは、私の太腿を抓つて、眴をした。私は譯がわからず、きよとんとしてゐた。

『俺に？』

祖父の太い聲が聞える。

『はい。他でありませぬ。お宅の坊つちやんと、私の娘と、婚約をお許しになるわけに行かないでせうか。門閥からいつても、人物から申しましても、天壌の差でして、まことに烏滸がましいことではありますが、柱げて、一つ――』

私は、顔が火照り、胸騒ぎがした。この光景を、父や母に一目見せたいと思つた。母は、私に嫁を取らせることを、命よりも大事なことにしてゐるし、父は、金議官に、あれほど侮辱されたのだ。

『あんな、鼻垂れを、結婚もありますまい。』

祖父は、如何にも、氣のない返事であつたので、私は氣を揉んだ。何故、よろしいといつてくれないのだらう。

『どうも世の中が、いつどうなるか、明日のことが解らないし、また當世では、十一と十五は、丁度いゝ年だと思ひます。二十にして室を有す、と聖人は仰せられましたが、今の世ではさうゆつくりもしてゐられませぬ。私も、娘さへ、名を付けてしまへば、いつどんなことがあっても、思ひ殘すことはありませぬし、差出がましいことではありますが、先生にしても、もう御高齢でいらつしやることだし――』

『どうも、御好意はありがたう』

しばらく沈默が續いてゐた。祖父は考へ込んでゐるらしい。やがて、祖父は、

『御好意はありがたいが、お受するわけにはまゐらぬ。』

と、きつぱり斷るのであつた。私は氣が氣でなかつた。いつたい祖父は、何故、こんなありがたい申出でを斷るのだらう。

『あ、さうですか。』

Ｍ隱士は、がつかりしたやうな聲であつた。しばらくしてから、Ｍは思ひ切れないやうに、

『まことに失禮ですが、お受け下さらない理山を一つ、お伺ひ致したいのですが。』

と、多少、喰つてかゝる調子であつた。

それでも祖父は默つてゐた。恐らく、空を眺めてゐるのだらうと思つた。

『釣合はぬとおつしやるのですか』

Ｍ隱士は、堪りかねたやうであつた。

『まあ、さうですな』

祖父は投げ出すやうにいつた。

『私の門閥が低いから、お宅と婚姻は、相成らぬとおつしやるのですか』

Ｍ隱士の言葉は、漸次憤りを帶びて來た。若いＭと私は、はらはらして、手に汗を握つてゐた。私は、祖父が、あの雷を爆發することを恐れた。

『とんでもない。あなたは歴として學者で、俺は酒屋の親爺ぢや。門閥の低いのはこの俺ぢや、俺の頭を見られい。冠を被らないこと、もう久しい。俺は一介の酒屋の親爺ですぞ』

祖父の言は、自嘲的であつたが、悲痛なものであつた。私は溜息をついた。

『とんでもないことをおつしやいます』

Ｍ隱士の聲は憤りの響きが消えて、むしろ、周章てるやうであつた。私は、ほんたうに、ほつとした。もうMの妹と結婚なんかせぬでもよいから、この場が無事に収まればよいと思つた。

『第一』

と、祖父は、大きな咳拂をして、啖を吐いてからいつた。

『俺の今の狀態では、あなたのお嬢さんを、孫嫁に頂戴しても、食はせるものがないのぢや。貧乏人の娘ぢやつたら、兎も角、あなたの方のお嬢さんぢや辛抱は出來ぬ。辛抱が出來なければ、お互に不幸ぢや。俺が釣合はせぬとは、このことぢやよ」

空氣は、濕つぽくなつたが、和やかにはなつた。

『そのことでございましたか』

Ｍ隱士は、自分が憤つたのが、恥かしいやうであつた。

『實は、私は』

と、Ｍ隱士は、いとも慇懃な調子になつた。

　『私は、そのことも考慮致しました。令孫を娘の婿にお許し下されば、令孫の學資一切は私が引受けます。もし、先生さへよろしかつたら、先生の晩年の生活は、私が何とか致します。婚姻によつて、兩家は一家になるのですから、それは、當然だと存じます。何なら、令孫は今日からでも、私のところにお引取りしてもよろしうございます。婚禮前ではよくないとなら、今月中に婚禮を済ましてもよいと存じます』

しばし沈默が續いた。

『さうはまゐらぬ』

　祖父は例の如く結論を先にいつた。

　『どうしてゞございます。何も御遠慮はいりませぬ』

　『いや遠慮ぢやごわせぬ』

　『では？』

　『俺は、まだ乞食するほど、零落してはゐないのぢや。親類縁者に頼る位ぢやつたら、七十男が、酒屋はやりませぬぞ。強て、お嬢さんを下さるなら、頂戴はしませう。しかし、着のみ着のまゝで、下さるのぢや。一文も持參金をつけることは、相成りませぬ。飢じい思ひも、寒い思ひもするぢやらう。それでよければ、頂戴します。それでなかつたら、二度とそのことはいはつしやるな。この俺も苦しうごわす』

祖父のこのことばに、私は嬉しくて堪らなかつた。やつぱり祖父は偉いと思つた。Ｍ隱士など、到底、祖父とは相撲にならぬと思ふと、とても愉快であつた。私は得意気に、若いＭを見やつた。若いＭは、氣のない顔をしてゐた。

　Ｍ隱士は祖父から、酒の御馳走になつて、歸つた。

　その頃、珍しい男が一人、この島に現はれた。それは平壌鎭衛隊の上等兵だと自稱するものであつたが、成程、軍服、軍帽を被つていたし、何よりも、彼は革のバンドを締めてゐた。上等兵なる男の言によると、この革帶では、人を叩き殺しても罪にならないのださうである。あの時の兵隊だから、丁髷の上にシヤポーを被り、足には、白木綿の朝鮮足袋に朝鮮草履を履いてゐた。ところが、この男は、銃剣を下げてゐないので、どうも脱走兵のやうに思はれた。私はもう一人、平壌隊の兵を見たことがあつたから解る。

　この男は、どうした因緣でか、よく祖父のところへやつて來た。祖父を見に來るのでなしに私に逢ひに來るのであつた。この男、字が分らないので、私に手紙の代書など頼んでゐた。私は得意になつてこれに應じた。

　或日、この上等兵なるものが、大きな白紙を一枚持つて來て、平壌鎭衛隊大隊長陸軍參領團某の名義で、艾島に出漁に來てゐる支那人たちに、金一千兩納むべし、といふ命令書を書いてくれと頼まれたので、私がその通り書いてやつたら、黍殼を割つて、朱をつけて、印を押した見たいにして歸つて行つた。

私は、そんなことは忘れて、大聲を立てゝ、詩經を讀んでゐると、晝も過ぎた頃、例の上等兵が、やって來て、山へ遊びに行かうと、誘はれた。この男を、私は虫が好かなかつたが、凄くて、抗ひ難いところがあつたし、また、平壌の話や汽船の話や、軍隊の話など聞かされるものと思つて、ついていつた。

上等兵は、行く行く十人ばかりの部下を狩り集めた。いづれも二十内外の、不良児で、私は、大抵の者の顔は知ってゐだが、氣味の悪い連中であつた。彼等は、文字を知らないのはいふにも及ばないが、袋叩き、強請、窃盗などを常習としてゐるものであつた。彼等は石投げや、泳ぎが上手で、屋根上りはお手のものであつた。いつ見ても、顔や足には、一つ、二つ生創をもつてゐた。

　私は、こんな連中と一緒に歩くのは、始めてだつたので、びくびくしてゐた。この悪者達、山へ行つて、私をどうかするのぢやないかな、逃げ出さうかな、とも思つたが、どうすることも出來なかつた。たゞ一つ安心なのは、彼等の親分であるらしい、例の上等兵が、私に心安くしてくれたことであつた。

　讀者は記憶してゐるだらうと思ふ。この島は略逆三角形をなしてゐて、南と西北との二邊が山、東が弦のやうな海濱であることを。西北の山を超えたところが、私の好きなＭの妹の家であるが、私たちが今上つてゐるのは南の方の山で、同時に、この島の最高地である。

頂上は、草ばかりで、誠に眺望がよかつた。直ぐ脚下には、銀色に光る沙濱があって、タガラ海峡を隔てゝ、タガラ島の嶮しい、いつも青黑い山が見え、右手は一望際みなき黄海のざわめく波が、六月の日光に煌めいてゐるし、左手には、これまた渺茫たる海面に、ナバ島が薄藍色に夢のやうに浮んでゐる。ナバ島に稲妻が光れば、時雨れるといふその島だ。私が涼しい風に吹かれて、雄大な風景に見惚れてゐると、

『こら、こち來ないか』

と、痛いほど、私の腕を攫んで、引張るものがあつた。

一同は車座に並んでゐる。

私はびつくりした。この惡者たちは、支那人漁民を襲つて、金品を強奪しようといふのであつた。さつき、例の上等兵が、私に書かせた、平壌隊大隊長の命令は、この目的のために用ひられるものだと解つた。私は、身慄ひした。

『おい。よせよせ。それぢや、強盗ぢやないか』

私は、堪らなくなつて一言いつたら、ぴしやつと、私の頬を擲ぐるものがあつた。

『この野郎。強盗だと。もう一度ほざきやがれ。飯が喉を通らぬやうにしてやるぞ』

と、いはれたかと思ふと、もう一つ拳骨が眼の前にちらつとして、私は、兩の眼から火花の散るのを覺えた。私は鼻血を出して、上衣の前が眞赤に染まつた。

『馬鹿野郎！』

　私は、また撲たれるのかと、眼を開けると、今度は、例の上等兵が、起き上がつて、私を撲つた奴を打ちのめしてゐた。そいつらは、

『惡かつた、知らなんだ』

と、上等兵にあやまつてゐた。

上等兵は、私の鼻血を拭いてくれながら、

『君、違ふよ。大隊長の命令ぢやないか』

こんなことをいつてゐた。

私は、上等兵に、

『僕は歸るよ。祖父さんが心配してゐる。』

と、頼んだが、聽き容れてくれなかつた。

彼等は私には構はず、相談を進めてゐた。上等兵に撲たれた奴等は、赤くなつた頬を、時々撫でゝは、撲つた奴を睨まずに、私を睨んでゐた。

私の眼は、かの砂濱の支那漁民の天幕部落に走る。アンペラで、屋形の天幕を張つたのが十ばかりあつて、濱には船が五六艘入つてゐた。只今引潮ではあるが、まだ船は浮いてゐるらしく、ゆらゆら動いてゐるのが知れた。潮が引いてしまって船が動かなくなつたら、襲ひかゝらうといふのである。

私は砂濱の天幕村の中に、私の好きな、汪さんの天幕を目で捜して、それと解つた。この惡者共が、金を要求して、その通りに應じなかつたら、屹度暴行を働くだらう。そしたらあの人の好い汪さんも、例の皮帶で、撲たれるかも知れない。何とかして、汪さんだけでも助けてやりたくなつた。よし、あの上等兵に頼んで見よう、と私は、いろいろと策を廻らした。

上等兵は、風呂敷包を解いて、軍服を出して着換へ、そして、李花徴章のついた軍帽を被つた。それよりも、私を仰天させたのは、彼奴が、私の剱を出して吊つたことであつた。

私の剱といふのは、私の高祖考のもので、高祖考が官職に就いてゐるときに佩いてゐたものであつた。高祖は文官であつたが、三品官以上は、軍職を兼ねる、朝鮮の制度であつたので、剱があつたのであつた。この剱は、私がもつとも大事にしてゐた二つ寶物の中の一つで、後の一つは、木製の四角い提燈であつたが、これも高祖考の遺物である。この上等兵とやらの男に、私が、この剱を出して自慢したら、これはいゝ、これは寶剱だ、おれが油で、よく切れるやうに砥いでやらうといつて、もつていつたものであつた。剱は、二尺位の短いものであるが、鞘は、黑の漆塗りに象牙の星の象嵌を施したもので、鹿の鞣し革の紐がついてゐた。

私は、この剱が好きで、四つ五つの頃からそれをいぢつては何度も指を切つたので、父は、一度取り上げて隱してしまつたが、強請られて、仕方なく、その刃を鈍らして、私にくれたのであつた。私はどこへ往くにもこれを持つて歩いた。袋に入れて背に斜に、かけて歩いたのである。寝る時にも、枕元に、この剱を置かないと寢つかないほどであったが、この頃は、それほどではなくなつた。しかし、これを傍に置いて居ると、何だか大變頼りになる氣がしたものである。

濱の光る工合によって、潮が引いたといふことが解つたので、私たちは、山を下りて、堂々と、支那人部落を襲つたのである。支那人たちは夏期だけ、出漁に來てゐるので、女はゐない。眞黑に潮焼した胴體を現はした連中が、辧髪で鉢巻をして、船から、天幕の方へ、しきりに獲物を運んでゐる。支那人は上體は脱ぐが、下は現はさない。しかし、こんな漁夫ばかりではない。上衣、下衣もきちんとつけた、所謂紳商風のものもある。これは、資本主で朝鮮のタラ船でいへば、船主といふところだ。私の好きな汪さんは、この濱に於ける、一番首の船主である。彼はまだ三十臺の若い男であるが、こゝに來てゐる支那人は、彼のことをワンラオイエ即汪老爺と呼んでゐる。祖父の言によれば、彼は、もと山東省曲阜縣の人で、文字のある人であるが、故あつて、沙河子に移住して漁業に身を隱してゐる人ださうである。汪さんはよく、祖父のところへ來ては、筆談をして、樂んでゐるのであつた。私は、半年前の支那人香師のことを記憶してゐたので、この汪さんにも、一種の親しみと好奇心を持つてゐたのである。

不幸中の幸には、例の上等兵は、汪さんがこの漁業陣の總元締であることを知らないやうであつた。彼等は、船から降りて來るものを捉へては、例の命令を突きつけて、盛んに怒鳴つたり、打擲したりしてゐた。船にゐた支那人たちは、船から驅け出しては、砂を掘つて、何か懸命に隱してゐた。金だらうと思つた。

革帶で叩かれた支那人の裸體からは、血が流れたが、彼等は、一銭銅貨や、十銭銀貨を一枚一枚、兩手に捧げて、

『老爺。老爺』

と、惡者共に拜んでゐた。そして、もう一しきり叩かれると、また二三枚貨幣を差し出した。こんなことで、手間を取つたので、他の船の支那人たちは、散り散りばらばらに逃げ出してゐた。

私は、惡者共が金をせびるのに氣を取られてゐる時を見計つて、汪さんの天幕目がけて歩いた。走つては目立つと思つたから、遊んでゐる風をして、ジグザグコースで歩いたのである。しばらく行くと、汪さんが此方へ歩いて來て居つたので、私は、砂の上に字を書いて、警戒せよといふ意を通じた。彼は急いで、天幕の方へ戾って行つた。私はもう安心して、惡者共のところへ戾つて來た。

彼等は、どの位強奪したのだらうか。干魚までも分取つて、今度は、天幕へと出かけるのであつた。親分の奴、私の寶剱を抜いて閃めかしてゐる。なるほど、よく研げてゐるらしく、日光に當つて青光を放つてゐた。こいつ、あの剱で刄傷沙汰だけは起してくれなければよいがと、私ははらはらしながら、そいつの傍を離れなかつた。いざといふ場合には、私はそいつの剱を持つた腕にぶら下がる覺悟であつた。

二三の天幕へいつたが、誰もゐなかったり、よぼよぼした爺が眼脂の溜つた眼をしよぼしよぼ瞬いてゐたりしたので、惡者共は、暴れ散らすだけで、大した獲物もなく、遂に彼等は汪さんの天幕を襲つたのである。

汪さんは泰然として、惡者共を迎へて、まづ座を勸めて、

『官人、請坐』

と紙に書いて出したので、私が一同のものに説明してやつたら、上等兵は、剱を鞘に収めると、アンペラ敷きの床の縁に、腰を下ろした。他の者も坐つた。汪さんは、上等兵から、命令書を受取ると、一揖して敬意を表し、それを丁寧に畳んで、懷中に収め、次は、支那焼酒や油揚げの魚を出した。食辛抱の惡者共は、こんな御馳走にありついたのは生來始めてゞあつたらう。實においしさうに、貪り喰つてゐた。

汪さんは、黑い壺の白乾兒酒が盡きる頃を見計つて、一圓銀貨三十枚を、新らしいタオルに包んで、首魁の前に出した。

一同の眼は、この三十枚の銀貨の光に眩しさうであつたが、さすがに、首魁は、

『三百兩ぢや、相成らぬ。一千兩ぢや。一千兩ぢや』

と怒鳴つた。

汪さんは、私の通譯を聽くと、

『官命至巌なり、豈敢へて違はんや。明日正午までに、一千兩揃へて呈上すべし。知らず、官人の旅館は何處なりや。この三百兩は、聊か、諸位官人の酒代なるのみ』

と、墨痕淋漓と書いて出すのであつた。

私は、このことを皆に譯して聞かせたが、暴飲した白乾兒の醉が廻つたせゐだらうか、一同のものは、いゝ氣持になつて、

『よし、よし。それでは、期を違ふまいぞ』

と、一應見榮を切つて、彼等は引揚げた。汪さんの機轉で、天幕の掠奪を免れたわけである。

　彼等は、歸りにも、さつきの山のところに集まつて、分捕品の分配をした。私にも、小さい銀貨を二枚くれた。

『劍を返へして下さい。』

と、私がいつたら、上等兵は、どう感じたのか、直ぐ返へしてくれた。

私は、劍を貰つたので、一刻も先きに歸らうとすると、一人の惡者が、いきなり、私の肩を押へて、

『この小僧、殺してしまはう。こいつ、われわれの顔を覺えてゐるから、尊位（島の役人）に何をほざくか解りやしない。』

と、皆に同意を求めるのであつた。彼等は、さつきよりも醉が廻つて、何を仕出かすか解りはしない。

『それに、この野郎、さつきのあの支那人と知合ひのやうだつたぞ。』

もう一人の奴がいつた。こいつは、先刻、私を撲つて、上等兵に打ちのめされた奴である。

私は、これは大變なことになつたと、びつくりして、頼みの綱の上等兵に眼をやつたが、彼奴も、今は、私を庇はうとしないばかりでなく、敵意ある眼で、私を見返へしてゐた。やつぱり私を殺してしまつた方が、文句なささうだと思つてゐるやうだつた。

私は遂に腹を定めた。

『ようし、いざとなれば、この劍で切り棄てゝやらう。』

私は、そうつと、劍の鞘に手をやつて、いきなり、劍を抜いて、一歩後へ下つた。さうして、誰でもかゝつて來いと、上段に構へた。

『ようし。己を殺すんなら、殺して見い。』

私は、きっと奴等を睨んだ。

私の肩を押へてゐた奴は、たしかに脅へてゐた。

『冗談だよ。君冗談だよ。切つちやいかぬ。切つちや困る。金をやるから、劍を収めたまへ。』

上等兵がかういつて、つかつか、私の傍に近づいて來た。

『近寄るな。誰でも近寄る奴は切るぞ。先に立つて山から降りろ。』

私は命令した。

一同のものは、苦々しいといつた顔をして、一足歩いては振り返り、二足歩いては振り返りして、もう安全だといふところまで行くと、一目散に逃げ降りてしまつた。一人の奴は、私を目がけて、石を投げたが、低いところから投げる石だつたので、ちつとも怖くなかつた。

私たちが山上で、こんなことをしてゐる中に、支那人たちが尊位に訴へたのだらう。私が、日暮頃祖父の家に歸つたら、支那人部落略奪の一味は、一網打盡になつたと、いつてゐた。あの脱走兵の奴は、潮さへ満ちて來たら出帆の筈のバナサラ行の渡船に潜伏してゐるところを格闘の末、縛り上げたさうである。

私が、悪者たちのために、嘘の命令書を書いたり、一緒に行動したりしたといふので、祖父は私が歸ると、火のやうに怒つて、

　『鞭を三本切つて來い。』

と、私に命じた。

　私は泣く泣く走つて行つて、ムブレといふ木の小枝を三本切つて來て、祖父の前に置き、ズボン□げて、ふくらはぎを現はして、祖父の前に立つた。

祖父は、小枝を一本手に取つて、二三度、曲げたり延ばし[た]りしてから、

　『お前の罪を知るか』

と、大聲で、どなつた。

『はい。悪うございました。』

『お前は強盗の仲間入りをしたな。』

　『はい。ここに銀貨を二枚貰つて居ります』

と、いつて、私は、腰の小さな金着から、銀貨二枚を出して、祖父の前に、置いた。祖父は、まさかと思つたらしく、この贓物の歴とした證據を見せられると、もう堪らなかつたらしい。手の鞭で私のふくらはぎを五つばかり、強く打つた。私は痛さに直立の姿勢が保てなくなつたので、踞んでしまつた。さうすると、

『意氣地なしめ。それ位の痛さに堪へないといふのか。眞直ぐに立て』

と、いひいひ、私の頭を、肩を亂打した。私は、やつと、直立の姿勢に戾つた。さうしたら、祖父は、また四五遍叩いた。鞭が氣味の惡い音を出して、二つに折れて飛んだ。私は、ぬらぬらするものが、ふくらはぎの皮膚の上を流れるのを感じた。血が出るのだと思つた。私は齒を喰ひしばつて、痛いのを怺へた。私は、悲鳴も上げなかつた。鞭の私の肌にぶつかる音が、ぴしやりぴしやりと、部屋中に響くのであつた。

　庶祖母が、臺所から入つて來て、私を庇つてくれたので、私は、それ以上は叩かれずに助かつた。

長篇小説　四十年（第3回）[[4]](#footnote-4)

孤児

私は、その年――といつては、はつきりしないだらうが、私が十一の年の八月、父と母とに死なれて、私と、六才の妹と三才の妹と、三人は、遺産のない孤兒になつてしまつた。私は、妹たちをつれて、島の祖父のところへ行くつもりで、薪船に乗込んで島に行つたら、祖父は、もう、コマツといふところへ移つてゐた。私は、餘程M家に立寄らうかとも思つたが、止めて、たまたま便船があつたので、例の白塗りのサナガ岩まで乗せていつてもらつて、そこから三里餘りの道を、（中断）

1. 『國民文學』1941年1月。この号の編集後記によれば「新たな視点に立って四十年の歴史の流れ」を描く小説になる予定だったようである。2月号には第2回が掲載されたが、3月号で最初の頁を残して削除され、そのまま中断した。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「追手」は「おいて」と読み、「追風」の意味。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 『國民文學』1941年2月 [↑](#footnote-ref-3)
4. 『國民文學』1941年3月 [↑](#footnote-ref-4)